
少女の目覚め

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女の目覚め

【Nコード】

N9416H

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

美優はどこかぼんやりとしていて、うさぎみたいに可愛らしい少女。雨に見舞われた修学旅行で聞いた講演会の話をつっかけに、美優は昔の自分を思い出した。

外はひどかった。

どしゃぶりとか、満たされたタライがひっくりかえったとかいろいろ例えがあるだろうけど、それすらも追いつかないくらいの嵐が吹き荒れていた。

私の住んでいる場所は台風なんてほとんどこないから、私は初めてテレビで見るような場所にいるのだなと思った。それにしても修学旅行でこれはアリなのかなあ。

「美優、飴食べる？好きでしょ」

座席の隣の香月が私に袋を見せながら言った。

私が小さく頷くと、ほいと私の手のひらに乗せた。

「ありがとー香月ちゃん、いつも貰って悪いね」

私は言った。ちょっと眉を引き寄せてしまったかもしれない。

卑屈かな？ 呆れられないかなと少し心配になった。

すると香月は私をまじまじと見て。

「はああああーカワイー」と自分の頬を手のひらで包んで叫んだ。がやがや騒がしいバス内と言っても、変な声だったためか、周りにいた人がわざわざ座席から乗り出して聞いてきた。

「どうした香月。変な声ー」

「いやわりと変だろ、香月は」

「まあそうだとしても。でもウケルなあ、その声」

勝手気ままに話す周囲に香月は言った。

「あのねえ、今見なかったことをあんたら一生後悔するわよ。美優の困り顔イン飴バージョン。はあーかわいかったわ、うらやましい」

「なに、それ？香月ちゃん」

私は首をかしげると、じろりと香月は私を見た。

ちよっと怖い顔だった。

「自覚してないのが、最強なのよね」

ぼそつと言った香月に周囲は同調する。

「ま、かわいいよな」

「小動物系、うさぎみてえ」

「うさぎって確か愛されないと死んじゃうんだよね」

「マジかそれ……まあ美優はずーと愛され保護されそうだなあ」

みんな、私のほうを見ながら言った。

視線が一点に私のほう——下を向きたくなる。でも嬉しいなと思う。

「そ、そうかなあ」

私は言った。

そうだと助かるなあ、と呟いた。

昔から特に中学に入ったあたりからか、私は「小動物系」とか「かわいい」とよく言われてきた。後、ぎゅーと女の子に抱きしめられたりもしてきた。

私の体は小さい。148しかなくて150あればいいなあと思ってきたくなる。

肌も白くてきれいだとよく言われる（が、私の住んでいる地方ではたいして珍しくない）

童顔は化粧を休日とかにしたくても、浮いちゃってできないのは、なんか物悲しい。

このことはあまり言わない。昔、カゲクチをよく叩かれたから。

私はみんなが私をちやほやというか、保護したい、かわいい、愛したいという感情を持たれてすごく嬉しい。愛されるのは心地がいいし気持ちいい。

けどたまに、よく分からないもやもやした気分になる。

けどその理由を、胎児のように丸まりながら自分に埋没しても、あやふやでもやもやしていてうまくつかめない。

私は寝つきが悪くて、暗闇のなかぼっかり目を開けて、よく考える。

けれどつかめない。

時間はたつぷりある、と思う。

考えるということ自体は自由で、情報はたくさんあるのに――

私は答えを見つけられない。いつも堂々めぐり、螺旋を歩き、疲れ、眠りに落ちる。

あまりの不毛さにたまに気が遠くなる。

雨は勢いをとめない。

このままだと目的の場所についても、どしゃぶりでもっと激しくなっているかもしれない。

街路樹の柳は垂らしている長い葉を重力無視の勢いで振り回している。

縁の薄い光景が窓の外で広がっていて、私は自然とみんなと話しているのに見てしまふ。

「ひどい天気よねー。間が悪いったら無いわ、もう」

香月は言った。

私は香月のほうを向くとあいまいに頷く。この手の唐突な言葉は正直苦手だ。

何が言いたいのだろうか？と思ってしまふ。

多分意味なんか無い、気の引くための言葉だと思うけど勘ぐってしまふ。

あ、言葉何か出さないと……そういうのはちょっとアレだ、慣れてない。

「今から行く場所って、アレだよねえ」

私は言った。

え？ という顔を香月はしたがすぐに納得するみたいな顔をした。

「ああ、アレだねえ……ゆううつー」

へによと声に出しながら眉をひそめ香月は口を尖らせた。

「……そうだね。って香月ちゃん。顔、顔！」

香月は女の子が絶対触れてはいけない領域に触れようとする変顔を

した。

思わず噴出して笑ってしまう。香月ちゃんは芸人やれると心底思った。

香月はしてやったりという顔をして、私と一緒に笑った。

バス内に響く笑い声、ぱつと華やいで消える花火みたいな時間。

ああ私たちはこういう風にしか出来ないんだなと思った。

すぐに訪れる沈黙は花火と違って情緒も味わいも無くて、むしろ身をよじりたくなるほど気持ち悪い。

香月は小さく苦笑いした。

私も同調すると、香月は力をなくした目でぼんやりと座席に頭を預けた。

それは普段とはあまりにも違う感じで戸惑ってしまうけど、いつか言った香月の言葉を思い出して、私は黙って香月を見た。

香月はかなり今回この場所には行きたくなかったらしい。

そのこれから行く、六十年前以上前に起こった戦争最大の攻撃を受けた場所、惨禍に。

まあそんな好き好んで、ここがメインだなんて言う高校生なんか想像ができないけど、香月はそれとは違う感じで嫌悪していた。

無駄だつて言った。

最初私はどういうことなのかとびっくりした。

どうして？と聞くと香月は冷たく人を射抜きそうな目をして言った。

「だって忘れてしまうじゃない。ああ可哀想でした、こんなことは

二度と起こしません。みーんな同じ感想、意見。それは正しいわ、

人の殺し合い。一度始まったら終わるまで善悪ごっちゃで、人が人でなくなってしまう。そんなの最悪よ。チョー最悪。けどね、私か

ら見たら最初に言った言葉を今の人が吐いても免罪符にしか過ぎない気がしてたまらない。自分をきれいにするための詭弁だわ！そ

んな言葉吐くなら行動しろ、考えろつての！」

けど、感想作文ださなきゃいけないのがくやしい。

くー、おのれ学歴社会めー。学校なんて所詮（以下略）

と永遠に続きそうな答えに困る愚痴を香月は始めた。

じゃあどうする？と落ち着いてから聞きなおすと、作文の雛形を作
ってくると香月はばやいた。

それにメモした内容を当てはめればあつというまにできるそうだ。

しかし……よく分からない香月の言葉。

香月は変でおもしろいけど、頭が悪いというわけじゃない。

自分の意見をちゃんと持っているし、基本しっかりした子だ。

けれどこの暴言ともとれる言葉の意味は、分からない。

だって難しすぎる。考えても答えが、出ない。

香月は純粹にこのことが嫌いで、そして安易に「可哀想」という言
葉を使うのが嫌いなのかも。

以前、「可哀想って言葉、最悪だよ」と言っていた。

それは結局他人事と頭で処理して、上から見ている、と。

私は香月のそういう苛烈さとか、何かしらの考え……いや彼女の正
義に基づいた言葉が苦手だ。

押されてしまう、苦しくなる。疎ましくなる。

香月が面白いだけの人間ならと思ってしまう。自分を棚に上げて。

もしも私が「可哀想」という意見が思い浮かばなかったら、分かる
のだろうか？

香月のあの苛烈さを受け入れられるのだろうか、そう思う。

ため息が出そう、やっぱり難しい。

やがてバスは大きな駐車場に止まった。

傘を開きながら外に出ると、ぴしゃりと足元で大きく水がはねた。

空気は冷たい。

まだ九月の終わりで、私の住んでいるところでもやっと秋の気配を
感じ始めたという感じなのに、×××のここは肌が突き刺さりそう
な冷たさだ。

雨を柵にした牢獄にいるようで、緊張する。唇が真一文字に結んでしまう。

隣を見ると香月は、がしがしと前髪をかきあげまっすぐ前を見ていた。

目線は気を張ったのかひどく強い。睨み付けるか挑むかのようだ。

「雨冷たいね」

「そうねー。……負けないわ」

ずんずんと香月は歩いていく。

すごいスピードだ、慌てて追いかける。

靴下に雨が跳ね返り汚れるのを肌で感じて不快になった。

そして香月にも同じ感情を抱いているのにも気づく。

今の香月は私の苦手な香月だ。

きつと彼女は彼女なりの考えで自分の正しさを追求していると、そう思っているだろう。

ああすごく不快、というよりうざいと思う自分がいる。

どうしてだろう。考えると立ち止まりそうで、私は頭を横に振った。今は歩こう、さっさと行かないと雨に心まで打たれてしまう。

自然とそんな言葉が頭に浮かんだ。

何だか嫌だった。そう、こんな想像ができた。

それは晴れた空から水が滴り落ちて空気を冷やす美しい場所じゃない。

もつともつと、汚い腐った場所。

足首までくるほどに腐って溶けている魚や肉、細切れの野菜で作られた汚泥が地面を占めている。光は無い。無いが、目が慣れているのか薄ぼんやりとした闇が広がっている。

ごぼごぼと水が落ちる音があちらこちらからする、周囲にある酸っぱい臭いが染み付いている壁の穴から、排水が流れ込んでいる。

臭気が立ちこめゆらゆらゆれる。

空気は脂といってもいいくらいだ。肌がともかくべたつき髪はすぐ

に脂で固まった。

脂汗を塗りたくられているような気がする。

そこを徘徊する存在は皆身体中、汚泥と血で濡れている。

血は空気の脂と自分の身体の汗で凝り固まり、黒光りしている。

身体感覚はほとんど失っている存在ばかりが住むが、舐めると全身がつる刺激が身体中に広がり汚泥の中でのたうちまわることになる。

たいがい汚泥を激しく飲み込み窒息し溶けていく。

そこに住む存在は笑っている。

薄笑いする目。逆の三日月の形をした唇。

日がな一日立ち、剥げた爪の手のひらをもつ存在は恍惚としている。極限の場所。

人が人ということやめなければ生きていけず、それをした途端はただ死ねないだけの存在。

だからこそ存在は恍惚としている。

そう、それは……噛み砕かれる金平糖。なはずだった。

はたつと意識が立ち戻った。

思わずワタワタと視線が頭ごとあっちこっちへとさまよってしまう。息が少しだけ、荒れていることに気づいた。

あううと口から勝手に出る。心臓の音が薄い胸を突き破りそうだ。

何だろ今の……。

私は胸をさすり、うつむいた。さすがに考え込む。

そうして重く息をついた。

わからない。でも……ここは普通の場所じゃない、惨禍だ。

ゆうれいとかいたりするだろう。それが見せた、モノ？　なのかもしれない。

私、そんな体質じゃないけどなあ、ここが特殊すぎる場所だからかな。

私はその結論を頭に刻むように、何度も声に出さずに繰り返した。繰り返すと、不思議な心持ちになる。

ふわふわと地に足が着いてないような、マシユマロの上を歩いているに近い感じで、現実感がない。頭がぼんやりとして、一部だけが何故か冴えている。

変な感じだ。

歩いて五分ほどたつ場所に学年全員がクラス単位で順序良く並ぶ。紺のブレザーだらけが一箇所に、動かないように言われても背中はどう揺れる。

なんか……黒い大きいものがもごもご動いているようだ。

目の前には大きな柱がある。伸ばした腕が掘り込まれた青銅の柱。誓いの柱、と言う平和の象徴だ。

それに向かつて代表が、手紙を読んでいる。

歴史を私たちは学びとかなんとか五分ほどで読み上げると、その手紙を大人の男性の胸の辺りの位置で開けられた誓いの柱に入れる。これは本当に平和の象徴、なかにぎっしりと誓いが入っている。

では移動と先生の声が聞こえて、みんなと一緒にぞろぞろと、惨禍の体験談を聞きに

近くにある遺品館と呼ばれる場所に向かった。

ぼそりと「あー昼飯までまだ？」とか。

「そういえば何か女子が倒れたらしいぞ」とか。

「幽霊見たって聞いたけど、やっぱいるんだなあ。気持ちわりい」とか。

いろいろ聞こえた。

関係ない又何故か私は思った。

その幽霊を見た女子は、おかしい。そう思った。

でも興味を持たなかったかといわれたら、ウソだった。

さすがに好奇心が疼く、ここが惨禍だったからだろうか。

それともさっきの変な映像のせいなのだろうか。よく分からない。

……難しい。

ぽんと肩がたたかれた。思わず身体をすくめてしまうと、戸惑う空気が伝わってきた。

振り返ると「美優……？」と心配そうに私の顔を香月が見た。

「あ、香月ちゃん……ど、どうしたの？」

「それはこつちだよ。ビクツとして、驚いた」

「ああ、うん。肩、急に叩かれて、ちよつと……」

アハハハ　と私が声だけで笑うと、香月は一瞬目を落としてから、呆然として普段の顔に戻った。

「そうなんだ……」

「香月ちゃん？」

私は香月を見ると、ふつと香月は視線をそらした。

「ごめん、私、加減知らなくて」

「……えつと、香月ちゃん？」

「ごめんなさい……」

子供みたいに香月はしゅんとして黙り込んだ。

溝という程に深くない、でも「うつう」という声が出そうな沈黙と手探り状態。

気遣ってはいけないから、私はこつ手を伸ばして空気をかき回す感じ。

香月は腕を組んで考え込んでいて、じくじくと思いつめている。

香月は、香月は強いけど弱いのだ。

そして私がいなくなったら、すぐ思いつめそうと、思う。

前に香月は裏サイトで中傷され、友達がいない。

時々、脆い。

ある意味、性格の苛烈さは、弱さの裏返し。もしくは、激しいアレルギー。

スズメバチに刺されて起きる……アナフラキーショック。
なんとなくそう思う。何で苛烈に走るのかはまったく分からないけど。

私は言った。

「行こ、香月。みんな行っているよ」

「へ？ ああうん。そうだね、行こっか」

香月はだめだねえ私、と笑う。

私も合わせて笑い、場を大雨の日の川のように、一気に押し流す。
香月は意外に粘着質だから、しばらく覚えているだろうと思ったがしょうがない。

それから、何度もやつちやうなあと思い返した。

講演会を聞くために遺品館内のホールに入る。意外と新しい建物で驚いた。

ガヤガヤしていた学年のみんな、けれど先生のあつという間の指示でおとなしくなった。

事前にいやというくらい、礼儀を正しくしなさいと言われたからだ。さすがにこの場で強烈に反抗する人はいないが、心内はどうなっているかは知らなかった。

やがて灰色の髪のおばあさんが入ってきた。

きれいな薄紫のシヨールを羽織って、私たちの前に置かれたパイプイスに座る。

そして手持ちのマイクにスイッチを入れて挨拶した。

声はマイクを通さなくても、静かでさえあれば服の吸収をものともせず遠くまで聞こえるほどにしっかりしている。きびきびした張りのある声。

おばあさんはその声で語った。

惨禍——破壊され燃やし尽くされ地獄になった×××の話。

朝早くのことだった。とおばあさんはじめに言った。

突然強大な爆発が起きて、轟音が響き渡った。

おばあさんはちょうど大きな建物の陰にいて、直接の被害は無かった。

びつくりして頭を抱えてしゃがみこみつつ、出てみると地獄だった。

火薬の濃い煙と血とうめき声で満ち溢れた道路。

皮膚が剥げて赤黒い筋肉をむき出しにして必死に助けを呼ぶ人々。

自分の服のすそをつかんだのがいて、何だと思ったら身体中の皮膚がはがれて血だらけな友達が助けを求めている。

頭がショックで真っ白になったおばあさんは、今はものすごく後悔するくらい乱暴な力でその友達を突き飛ばし叫んだ。

地面に落ちた友達はグニと、不気味な音を出してもう動かなかった。ますますおばあさんは叫んでその場から逃げた。

街中はおばあさんが最初にいた場所よりもっとひどいものだった。悪臭が息が詰まるほどに立ち込めて、身体中がべたついた。

人間の脂がまつわりついていたのだ。あの爆発の瞬間に大量に死んだ人々の脂が見えない形で残っていた。

まわりは火が出たのか真っ赤で、自分が突き飛ばした友達のような人々がゆらゆらと赤と黒と茶の混じった地面の上をたゆたっていた。おばあさんは歩いた。この場所から早く逃げたくて、山へと向かった。

何人もの人の助けを呼ぶ声を無視で突き飛ばし、耳を両手でふさいだ。

初めて泣いたのは山についてからだだった。理性が立ち戻り、熱が冷めて吐いた。

街のあまりの変わりように、自分の手のひらが血で真っ赤なことに。そうして友達を殺し、助けの声を無視した後悔は今も続いている。

はあと息が出た。熱い息が私の口からこぼれていた。

私は胸に手をやり呼吸を整える、心臓はどくどくと鳴って身体中に

勢いよく血を送り出す。

手のひらは汗が出ていてしっとりしていた。頭は冴えて、高ぶっている。

狼みたいだ。なんというか獲物を見つけて興奮している、そんな感じの狼。

血肉を噛み切り飲み込みしゃぶりたい。

そして遠吠えは残骸と血が散らばる上で、思いっきり猛々しく。

そう、私は興奮していた。

ええ！　と思った。

何で興奮しているんだろう。うわうわうわ、おかしいよ、普通じゃないよ。

気持ち悪……い？　あれ、私落ち着いている。

混乱したけど、落ちついている。そう隙間にちょうどはまる箱みただ。

この興奮は。どうして私は……どうして。

美優はちゃんと考えて殺していたのよ。

あんな小さい子が、よ。

あれは善悪の分からない子供の行為じゃない。

どうして、ああなったのかしら、分からない。

私はあの子を普通に育ててきたのに、どうしてなのよ。

全然分からない、娘なのに。分からない。

もっと分かりやすい子だったらよかったのに。

普通じゃない……正直、怖いわ。

パリンという音が頭の中でした。じわじわ映像がまぶたの裏に広がっていく。

どうして忘れていたのか。でも、思い出した。そうだ。そうだ。そうだった。

身体が震える。親指の爪を噛んでうつむいた。
今まで閉じ込めていた私の土台が帰ってきて、私は喜ぶとは違うけど。

もつと強い感情で胸がいっぱいだった。こう言いたかった。
おかえりなさい、私の世界。

この世で一番汚い、世界。すべての生き物の尊厳が失う最低な世界。
私の頭で成立する、本来なら現実に噛み砕かれる金平糖
身体がぶるぶるした。皮膚も内臓も打ち震えている。

小さなころの話だ。

まだ小学校にも上がっていない頃。

私の遊び場は近所にある城跡だった。
ちゃんと整備された城跡じゃなくて、林に囲まれたグラウンドとい
う感じの城跡だった。

そこでよく一人で遊んでいた。
私の住んでいた町内は少子化が激しくて私一人しか子供がいなかつた。

だから保育所以外だと、どうしても一人遊びで。

周りの大人は優しく猫かわいがりしてくれたけど、昼は仕事や農
作業でそばにいなかった。

そんな環境。初めて潰したのはミミズだった。

強烈な日の光の下で短く刈り取られた草の上を、ミミズが這って困
惑したように身体を丸めていた。きれいなピンクに近い赤の皮膚が
見えて、私は靴で踏んだ。

猫のイラストの子供靴で踏んで、ぐりぐりとした。

でも踏んだのは先端だけだったから、変な汁を出して皮膚を電気が
走ったみたいにミミズは痙攣した。

私はそれを少し、被っていた薄い青の帽子の下で見ながら、今度は
石を持ち出して何度も振り下ろし、形がなくなるまで続けた。愛お
しかった。

その嘔吐物みたいに草に広がるミミズの残骸が本当に好きだった。汁が顔にかかったけど、満足していた。

私は毎日続けた。

ミミズを潰し、あまがえるを地面に叩きつけてから伸びたその黒い目を尖った石で突き刺した。

大きいかえるはコンクリートの上でひっくり返し、白いすべすべした腹を割いて中身を引きずり出して、高い断末魔をあげる口には草をつめた。

それでも痙攣を続けるかえるは嬉しくて、手足を潰した。

トンボはたくさん集めて、一匹ずつ、小さな池で少しずつ沈めたりあげたりした。

水からあげた直後にばたばたして、少しずつ動きが鈍くなってぶかぶか池にたくさん浮かんだ。

でも、物足りなくなつた。

弱かったから。価値が無いと思った。

壊す価値が無い。困ってしまった。

私は強くて、壊すのが難しくなきゃ、つまらないと思うようになった。

なんというか、母親を例にしたら。

私は母さんが好きだ、でも壊す価値は無いと思っている。

なぜならあっさり壊れるから、つまらない。

母さんは好きというのは生まれてから生まれた感情。

壊したいは本能欲求。

私には破壊ということが、神経みたいに身体中に張り巡らされていて。

本能欲求から金平糖が生まれている。

だから普通の金平糖よりも強くて、進化している。

暴走しない。計算できる。普通ができる。

私は、つまらないと感じた時点で……世界を壊すことはできないとわかっていたのだろう。

だから強い世界を壊すことを、すべての破壊よりも優先した。

私の本能から発生する幻想でも、結局金平糖にすぎない。

現実には、直接干渉できない。

私という媒介が無い限り、そして私であるために、破壊は抑えられてしまう。

私は小さな子供だった。

今よりずっと非力で、壊すのは虫や小さな爬虫類。

私は不満から、でも強いものは物理的壊せなくて、量で勝負した。

朝から夕方まで、石を振り下ろし潰し続けたこともある。

終わりのころ、夕焼けに照らされた潰れた虫やかえるは真っ赤に染まり、疲れた私はぼうとその真ん中で座り込んでいた。

満足感と疲労感と矛盾する物足りなさ。

もっと、もっと。私はうわごとのようによく呟いた。

もっと、もっと、壊したいよう。

それを母さんに見られた。母さんの叫びはものすごく、私はいい声だと思った。

私はバチンと頬を芝生に身体が吹っ飛ぶくらいの勢いで叩かれ翌日、病院に連れて行かれた。医者ことはほとんど覚えていない。あれこれ質問された気がする。

その晩、母さんが私を怖いと言った。

私は泣いて、母さんのひざにすがりついて、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいと言いつづけた。

感情が本能を抑えた。

危険です、命の保護を最優先にしないでと感情が言った。

私の頭はぼうとして、その判断に頷いた。それが今まで続いた。

「ちよつ、美優大丈夫！ 身体、すごい震えてるよ」

「か、づき、ちゃん……？」

香月は私の背中をさすった。温かい手のひらだと思った。

「大丈夫？　なんか尋常じゃ無かったよ」

「うん、大丈夫、だよ。香月ちゃんがさすってくれたから」

「へ」

香月は変な声を出して、それから顔を真っ赤にしてから、あ、はははと笑った。

「何よ、急に、恥ずかしい」

「本当だよ。香月ちゃんは優しくて、そして強い」

香月はますます真っ赤にして困ったように目をそらした。

「やだ、もう。むずがゆいよ。美優」

香月は背中をさすった。

私は愛されているなと思った。

私は愛されたい。

私が愛されるというのは、誰かに与えられるはずだった愛を、その可能性を潰すことで発生する。世界を壊すのだ。特に愛によって構成された世界をずたずたにする。

昔力ゲクチを叩かれたのは、世界を激しく壊したから。

全てはじめての愛の世界を壊したから。

だけど弱い。

二人で構成する愛なんて、相当なこと無い限り、弱い。弱すぎる。

それなら一人の心で作られる、強固な幻想、金平糖を砕くほうが楽しい。

死ぬよりつらい場所に連れて行ってあげたい。

私は強いものが好き。感情の愛よりも、壊す価値のある強さに惹かれる。

香月は私の背中をさすりつつづけている。

私は心の中で語りかける。

ねえ香月。

私はあなたを世界で一番に想っている。

あなたは強くて、私の一番嫌いな正義をもっている。

なんて強い世界。若さゆえの幻想。

それを持つのに脆さのある心。

ぞくぞくする。

だから私はあなたを守ろう。

全力で、あなたを守って、誰にも傷つけさせない。

どんな時も裏切らない。

元友達に裏サイトで中傷されて傷ついたあなたを絶対に守る。

だって、だって。

私がいつかあなたを絶対に壊すのだから。

闇の中、血だまりに沈みかけるあなたの身体を抱き、髪を撫でるのを楽しみにしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9416h/>

少女の目覚め

2010年10月11日21時37分発行